

平等であるということ

成瀬中学校 三年

大倉

志乃

「おはようございます。」

毎朝交わすお決まりの挨拶。人と人が繋が
る二とが出来る魔法の言葉。でも、それが聞
こえないとしたら、言えないとしたら、じゃ
あそれはその人とは繋がれないとなっ
てしま
うのでしょ
うか。それは違います。

私がまだ小学校三年生の時に、総合の学習

で福祉について学習する機会がありました。
生まれつき目の見えない人がいる。耳が聞こ
えない人、足が不自由な人がいる。私はこの
事実を知って衝撃を受けました。なぜなら、
その時の私はまだ幼かったため、そんな人は
いないと思っ
ていたからです。自分が見えて
いるこの景色も、聞こえている友達の声も、
全てが当たり前ではないことを知りました。
ある日、特別授業で車いすに乗ることがあ
りました。実際に乗ってタイヤを回す側、後

ろから押してあげる側もどっちもやったので
すがそれはもう本当に大変でした。少しの段
差を通るだけですごく力を使いました。思っ
ていたよりも車いすがすごく重かったのを今
でも鮮明に覚えています。

障害を持つている方々の体験を通して一つ
一つの生活が大変だと知ることが出来た後、
私はふと思いました。

「自分のことが嫌になったりしないのかな。
体のどこか一つでも使えないなんて不便だと

思うし、そんな自分が嫌でしうがなくなっ
ちゃうんじゃないかな」と思いました。

でも、そんな私の考えは中学生になつて無
くなりました。

中学一年生の頃、とある講演会で私はある
人物にすごく興味を持ちました。彼の名前は
ケニー・イースタディ。またの名を、スケボ
ーに乗った天使。彼は、出生時より脊椎が
途中までしかない未発達状態であり、またそ
の後、脚の付け根に悪性腫瘍が見つかり、脚

を完全に切斷してしまつた。それでも彼は、
車いすに乗ることや義足を付けることを嫌が
り、自由に暮らしていた。そしてなにより、
ケニーは自分のことが大好きだつた。
私はそれを知つて、今までの考え方が大き
く変わりました。やはり、人はみんな平等だ
と改めて思つたのです。何を思おうと、何を
しようとして、あなたは○○だからいけない
なんてことは一切ありません。障害を持つて
る方々は生活していく上で出来ないこと・難
しいこと沢山あります。でもそれを私たちが
支えてあげることがすごく大切だと思います。
でも、いざ町中で障害を持つている方と会
うとどうしても勇気が出ませんでした。もし
私が話しかけて相手の方が障害という壁を大
きく感じてしまつたらどうしよう、と考えて
しまうからです。結局、その人には何も出来
ませんでした。家に帰つて一人で反省をしま
した。次こそは必ず話しかけよう、声をかけ
て助けてもらつた方が嬉しいはずと信じるこ

とにしたのです。

数週間後、私は白い杖を持つた視覚障害の方と出会いました。その人は、点字ブロックを探しているようでした。私は勇気を出して声をかけました。そして、失礼しますね。と言って杖をゆっくり点字ブロックの上に動かしてあげました。すると、その人は笑って、ありがとうございます。と言ってくれました。すごく嬉しかったです。

目が見えなくなつて、耳が開こえなくなつて

て手を取り合えばいい。その人に合つた交わる挨拶をすればいい。どんな人でも繋がることはできるんです。これから、誰だつて平等に過ごせる平和な社会が続きますように。